
いつか消え去るものだとしても

門 一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか消え去るものだとしても

【Nコード】

N0913P

【作者名】

門一

【あらすじ】

主人公「僕」が父親と山へ星見に行った時のお話。
すぐに読める短編小説です。

（前書き）

小説を書くのは初めてなので下手な文章かもしれませんが、最後までお読みいただくと幸いです。

僕は今日、お父さんと山の上まで星見に来ていた。

「うわー、夜空に星がいっぱい見えるね」

僕が覗き込んだ双眼鏡には無数の星が夜空に輝いていた。

「そうだな。やっぱり星見は山の上だな、都会じゃあまり綺麗なの
は見えないからな」

「うん、小さな星もちゃんと見えて星空が凄く綺麗に見える」

そうやって僕が双眼鏡から星空を眺めていると、一つ夜空から星の
光が消えた。

「あれ？小さい星が一つ消えちゃった」

「ああ、星が出していた光が地球に届かなくなってしまったんだよ」

「星が無くなっちゃったの？」

「いいや、星はずっと前に無くなっててその輝きだけが残ってたん
だよ」

僕は消えてしまった星があった所をじっと見つめる。

「あんな綺麗に輝いてたのに本当はずっと前に無くなっちゃってた
なんて、なんだか悲しいよね」

「そうかもな、だが形あるものはいつか消え去ってしまうんだよ」
そう言われると、やっぱり悲しくなってくる。

「だがな、俺たちは星の輝きを綺麗だと思う」

「いつかは消え去ってしまうかもしれないが、それは素晴らしいことなんだと思うよ」

お父さんはそう言つと星空をずっと見上げていた。

僕もお父さんと一緒に星空を見上げ続けた。

この夜空の無数の輝きを目に焼き付けるように。

（後書き）

お読みいただきどうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0913p/>

いつか消え去るものだとしても

2010年11月23日18時44分発行